



任当初は苦勞することも多かったかもしれませんが、伊藤は学生時代に男性の多い土木科で過ごしてきた経験と根性、そして柔軟さをもっています。それを武器とすれば、生じるかもしれない様々な軋轢を乗り越えていくだろう、と信じていました。

また、言い方を変えてみれば、会社の「期待」を彼女に託してみたということです。様々なライフィイベントがあり、自身のキャリアプランを見つめ直すことが多い女性。結婚や出産、子育ては女性男性問わず人生の中で大切なターニングポイントとなりますが、とりわけその選択の幅が広く、決断を迫られるのは男性よりも女性の方です。だからこそ、会社の「期待」を女性に伝え続けることが大切だと私は思います。

ですが決して「子育てや介護で休むのは女性」「女性だからこ

の仕事は任せられない」ということではありません。当社が目指すところは「技術者としての成長」。「男性として」「女性として」ではなく「人として」成長できる会社作りをしていきたいと考えています。現在、介護休業を取得している男性社員もおりますし、どんどん現場に出ている女性社員もいます。

これからの時代、働き手は性別も、国籍も、宗教さえも多様化していきます。そのようなダイバーシティ化がすすむ社会の現状に沿った社員の意識改革が必要と考え、2018年度には外国籍の女性が入社予定です。文化も宗教も違う彼女の採用は、彼女自身、そして迎える我々にとっても新鮮で、良い「驚き」になると考えています。

建設業界ではあらゆる場面で神事がつきものです。例えば新し

ダイバーシティ化が進む社会に対応していく会社に

「男性として」「女性として」ではなく「人として」の成長を支える

建設業界は、女性の比率が少ない業界です。現状、当社の従業員数は92名。そのうち男性が72名、女性が20名で、男性と女性の比率は大体7対3です。業界的に見ると女性が1割にも満たない会社も多く、当社の女性比率はかなり高い方です。

そのような状況の中で、当社を志望し入社してくださる女性は、それだけ「この道のプロになりたい」という意気込みをもった女性。今回副社長に抜擢した伊藤もその一人でした。体力面では男性に比べ女性の方が不利なこともあります。建設業界は力仕事だけではありません。設計や測量など、多岐にわたる仕事があります。また、ある程度専門的な知識や資格をもっていないと携わることが出来ない仕事が多いため、高校、あるいは大学から「建設業界で働きたい」という強い気持ちを持ち、学んでこなければいけません。その

点伊藤は、高校そして大学も土木科で学び、豊富な知識と先述のような強い気持ちをもって入社してきてくれました。そんな意気込みを会社側も応えなければ、と年々感じるようになりました。

2017年4月に副社長を3名選出し、うち2名は30代と40代の男性社員を、もう一人は30代の女性社員である伊藤を抜擢しました。過去の経験をベースに舵を取るのではなく、新しい風を取り入れてこれからの会社を作っていきたいという思いがあり、このような決断をしました。現状より先の、次世代のことを考えてみた時に、今、現場に携わっている者達を副社長に据えることによって、より社員の声を拾いやすく、より私から社員までの風通しがよい会社にできるのではと思ったためです。

選出した3名、特に伊藤の場合、部下には経験豊富な年上男性社員が多いため、気負うことや、就

く工事を始める際の安全祈願や神棚の設置など。現在も宗教が違う社員に強制はしていませんが、異なる配慮が必要だと感じています。日に何度かお祈りが必要であれば業務時間内でもその時間を確保する。皆で食事をする際は、信仰する宗教で口にはいけない食べ物があれば食べられる料理がある店にする。私たちが「当たり前」と思っていることは彼女にとっての「当たり前」ではないということを、私をはじめ社員が自覚するとともに、彼女の、他国でより良いもの

を学ぼうとする「ハングリー精神」からも、刺激を受けてほしいです。そのような違いを知ることで、様々なお客様のニーズを汲み取り、社員同士でも国籍、性別といった括りだけでなく、一人ひとりの多様性にお互いに配慮できる関係性を築いていきたいと思います。

様々な社員の様々な働き方を尊重し、同時に会社にも有益となるような土壌づくりにもこれからも努めていきたいと考えています。



COMPANY PROFILE

株式会社 東北構造社

1994年に設立、主に民間顧客を対象とした建設支援業務を行っていたが、現在は民間事業だけではなく、公共事業の建設コンサルタントとして事業に携わることも。2014年に20周年の節目を迎えたが、その間に宮城県北部地震、東日本大震災が発生。様々な復興事業に従事しながら、建設業界の多様なニーズに応えるため業務分野の拡大や新しい人材を採用・登用し『明るい未来を創る建設コンサルタント』として成長を続けている。

「平成25年度『いきいき男女・にこにこ子育て応援企業』宮城県知事表彰 最優秀賞」受賞

従業員数/92人(女性20人・男性72人)

代表取締役社長 辻川 友博さん

2012年より現職。多様化する雇用形態に対応するため、年齢そして男女の隔たりにない役員の選出や海外の労働力強化の足掛かりとなる人材の採用など、新しい指針を掲げ、社内そして社員の意識改革を行っている。





「個人の成長は何か」 を考え仕事を任せる

広々としたオフィスでは
意見交換も活発



性社員も増えました。また、男性社員が介護休業や育児休業を取得したり、NO残業デーの実施など制度が整備されてきました。そのような中で会社の方針として変わらないことは、「個人の成長は何か」を考え仕事を任せる」という点です。

ある女性社員は約2年間、岩手県田老町の震災復興事業の現場に出勤していました。もちろん、出向先では他社の男性社員と一緒に業務にあたっていました。2年間、なじみのない土地で仕事をすることは肉体的にも精神的にも大変なことだったと思います。しかし、出向が終わったその女性社員が戻ってきた時は、すごく良い顔になっていました。仕事のスキルに加え、彼女自身の成長と自信になったのだと思います。

私も設計の仕事で現場に出ることもあります。現場に出ると自分で書いた図面が立体化されイメージが掴みやすくなるのです。

働きやすさも重視しながら「個人の成長」に繋がることはやらせる。良くも悪くも男女平等の環境は「男性」「女性」と

「会社の一責任者」 そして「一技術者」 として成長して いきたい

執行役員副社長
伊藤 麻衣子さん

2017年4月に副社長に就任。設計の仕事の傍ら人材派遣の窓口も担当。社内・社外問わず会社の顔として、かつ一技術者として多岐にわたる業務を担当している。



高校そして大学と土木を専攻し、高校では40名中女性は私1人、大学では100名中女性は私を含めて2名という、周りはほぼ男性という環境で土木に関することを学んできました。同性が周りにいないという寂しさもありましたが、「自分のやりたいこと」を第一に据え、勉学に励んだ結果、志望していた設計の仕事に就くことができました。ただ、当時は世界的に結婚から出産のタイミングで辞めてしまう女性が多く、専門知識を身につけているのに、勿体ないなと感じていました。ですが今は、女性社員が働く環境も変わってきました。

現在、各部署チーム制で動いており、1人で業務を背負い込まず皆でカバーし合って業務にあたっています。「誰かが欠けても動けるように」。例えば家族が急に病に倒れた時も、出産・子育て・介護に直面した時も、心置きなく休みがとれる。そんな「傷を治すようにカバーしあう」風土がいつの間にか会社全体に広がっていました。

昨年4月には副社長に就任。正直に言えば、ずっと緊張しています。ですがやりづらさを感じた

ことはありません。社長をはじめとする周りの皆さんが私のことを理解してくださっているおかげです。

変わったことといえば他社の受け止め方、でしょうか。人材派遣の窓口も担当しているので名刺をお渡しする機会が多く、皆さんに驚かれます。「その若さで副社長なんて珍しいですね」という声もありましたし、「女性なのにすごいですね」という声もありました。

そのような声をいただく、自分はこの役職を与えてくださった会社への懐の広さを感じると同時に、業界として女性の活躍はまだまだ進んでおらず、様々な側面から取り組んでいかなければいけない、と思いますね。

私が一番強く感じる部分は「会社の一責任者」という信頼と期待を会社から任されている、という点です。だからこそ「偉そうにしない」というのをモットーにして業務にあたり、コミュニケーションを取るようになっています。

経験は周りの男性社員の方が圧倒的に上。気負わず、おごらず、の姿勢を心掛けています。

東日本大震災後は会社全体の人数も増え、それに伴って若い女

してではなく、「個人の成長」、ひいては「会社の成長」に繋がっていきます。

2018年4月からは、外国籍の女性が入社予定です。女性であったり、男性であったり、外国籍であったり。様々な方が今後とも後輩として、入社してくると思います。

入社してきた後輩には「頑張るな」という言葉をかけたかったですね。この言葉、会長から教わった言葉なのです。「頑張る」と思っている、「頑張らなければなら

ない」という思いが変わってプレッシャーに潰されてしまったり、あるいはミスをしてしまった時、怒られないように仕事をやるようになってしまいます。

困った時は周りがカバーし、自分がやれることをやる分だけやる。そんな意味を込めた「頑張るな」を声かけ出来る副社長になりたいですし、一人ひとりの社員がそのような風土を感じられる会社づくりに励んでいきたいと思っています。

